
暗い

小林希生

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

JのPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タ
テ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または
は「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒ
ナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範
囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致し
ます。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

暗い

【Zマーク】

Z4890D

【作者名】

小林希生

【あらすじ】

なまけモノだが口だけは達者だと思っている小山舞子、自堕落な
生活に終止符を打つべく山田運送株式会社の経理の職を得る。これ
で実家暮らしでの肩身の狭い生活から脱却できると安心したのだが・
・山田運送にはとんでもない秘密があった。

1 面接（1）

「どうやら問題は解決したようだ。一時はどうなることだらうかと心配で仕様がながつたが解決したのなら良かつた。

ペットボトルを手に舞子はドアを開けた。

ドアを開けると色黒の男達が3人、田舎の商工会議所にあるような安物の長机に座っていた。エアコンはあまり効いていいらしく少し、というか舞子にとつてはすぐ寒かった。

男達は書類に目を通している。きっとあれは履歴書だろう。でも何故3部あるのだろうか、そうか、きっとコピーしたんだろう。男の1人が舞子に質問した。

「あんまり面白くない仕事だけどいいかな」

「ハイ、大丈夫です。とゆうか面白くない仕事とは考えていません、仕事なんて、仕事なんていつたらアレですけど。最初から面白い仕事なんてないと思うんですよ、御社のホームページを見させていただきました。仕事の内容ですか、経理。私経験が無いので良くわからないのですが、裏方ですか、裏方で支える、縁の下の力もちつていうか、そういう仕事をしたいなあと」

本当はそんな仕事にはまったく興味が無かつた。でもここで正直に「仕事したいだけ」などといつても何の得にもならない。

学生時代、講義もまともに出席せずバイトとサークル活動に明け暮れた舞子は、周りが就職活動で騒々しくなつても特に何もせず、遊び友達が徐々に少なくなつてとうとう1人だけになつても就職活

動をしなかつた。留年ぎりぎりの成績で短大を卒業する頃にはもはや時すでに遅し、新卒求人は無くなつていた。

舞子は新卒で就職することが社会人生活にとつて有利なことを知つていたので、中途入社する気は無かつた。かといって具体的に何か行動したかというと何もしていなかつた。

卒業後逃げるように地元に帰つてきた舞子は実家からすぐ近くのコンビニで週四田のアルバイトを始めた、そのコンビニのオーナーは舞子が小さい時からの顔なじみであり、就職しあぐねた舞子を歓迎してくれた。もともとこの田舎町で酒屋をやつていたのだが、一昨年コンビニオーナーに転向した。オーナーの娘は舞子と同い年で、小学校、中学校と同じクラスで育つた。彼女は今関東の国立大学三年生だ。

そういうわけで舞子はここ一年フリーーターとして日銭を得て暮らしていた。といつても実家暮らしで別に貧しいわけではなく。だらだらと過ごしていた。舞子自身は記者やコンサルタント、広告業界など、おおよそ大半の、自分をそれなりだと認めたくない学生があこがれる職業に就きたいと考えていた。が、現実就職となると求人数が極端に少ないばかりか、休みがないとか、将来性が無いとか、どんな職業にも当てはまるような抽象的で漠然とした不安で舞子はそういう求人に応募するのをためらつてばかりいたので現実は何も変わらなかつた。

半年が過ぎたあたりから、舞子に對して両親が冷たくなつた。ちやんとした仕事、正社員になつてない舞子に苛立ちを覚えていたのだろう。場の悪さに耐えられなくなつた舞子が応募したのが、山田運送株式会社の経理職員であつた。結局彼女は、表舞台に上がる職業に挑戦する勇氣も無かつたのだ。

「小山さんのような方だつたらこの職種にぴつたりだと思いますね。

「ところで小山さん、短大を卒業されたのが去年ですね、何か他の仕事なんかされていたのですか」

「どうしても自分が希望する職種が無くて、色々な説明会にも参加してお話を聞いては見たのですが、やはり就職となると今後の人生にも大きくかかわってくるものですし。妥協はしたくなかったので就職は見送りました。この一年間は、サービスや流通の事を少し勉強してみようと、アルバイトですがコンビニで働かせていただきました。あと地元に貢献したいと考えていましたので、今回御社が求人を出されているということで早速応募させていただいたんです」

明らかに言いすぎだった、山田運送はそんなご大層な会社ではない。建物も薄汚いらくだ色で窓枠から黒いシミが壁に伝っている。社内も薄暗く、活気も無いが、選考を受けるのだから仕方の無いことである。

1 面接（1）（後書き）

感想・意見など大歓迎です。よろしくお願いします。

2 面接（2）

今回の選考、舞子は新卒採用として参加しているわけではない。バイト先のオーナーが「いい話がある」といつて持ちかけてきた話である、詳細な募集要項があるわけではなく、オーナーを間に挟んで山田運送と連絡を数回取り合つた結果、本来は学歴不問で年齢不問だが、舞子が商学系の短大卒であるからということで報酬に多少色をつけてくれることになった。舞子も最初は乗り気では無かつたが自分が多少なりともエリート扱いされていることに悪い気はしなかつたので、オーナーの顔を立てるつもりで面接に参加することにした。

面接を受けるまでは結果はどうでもよいと考えていた、だから舞子は面接には私服で行つた、そもそも舞子は就職活動をまともにしたことかが無かつたのでリクルートスーツを持っていなかつた。それに、これは会社に来てみてわかつたことであるが山田運送はリクルートスーツで行くことのほうが不自然に思えるような会社である。

「ところで小山さん、そのお茶はおいしいですか

舞子は言葉の意味がわからなかつた。舞子の座つている椅子には机は無いのでもちろんお茶など出されていない。対面している3人の男達の前には湯のみに入つたお茶がある。みなそれぞれデザインが違うので個人の所有だらうか、先ほどから一番口を開く真ん中の男の湯のみはかわいいのかかわいくないのか判断しかねる猫のデザインの入つたものだ。これで女子社員の気を引こうとしているのではないかと考えたが、そうだとしてこれは無い。逆効果だ、きっと真ん中の男は女子社員に良くなは思われていらないだらうと勝手に想像した。

「あの・・お茶つて何でしょ?」

「小山さん持つてるのですよ、最近テレビでよくしゃべっていま

すよね」

「あつすみません」

男は舞子が手に持つてお茶につけて言つてゐるのだ。

「ああ、やうこつ意味じやなくて、まあこんな会社ですから。いやあ、いんなこと言つてはいけないですねえ。そんな肩肘張らすにいいですよ」

「申し訳ありません」

「で、そのお茶おこしこですか」

舞子は「このお茶が有名かどうか知らなかつた。CMでやつていてと言つていたがあまりテレビを見ないので男のいうCMを思い出すことができなかつた。話が売れているかいないかの話になつたが、舞子はコンビニで働いてるので一番売れているお茶が何であるか大体の見当は付く。紛れもなくこれは、売れていない。卖れていないから、舞子は店のバックヤードから一本拝借してきたのだ。

「実際コンビニでの売れ行きは芳しくないと感じますが、おいしいですよ。これ最近出たものでメーカーも力を入れているんでしょうが、売れるとしたこれからかもしれませんね」

「やうなんだあ、テレビでやつている割には店では見かけないから、もつ売れちゃつたのかと思つてました」

「やうですね、わからないものですね」

お茶の話はこれつゝきり出てこなかつた。この後、短大生活について、両親について、通勤手当の支払い基準など、ありきたりなやり取りを行つた。

「じゃあ小山さん、いつから出てこれますか」

「えつ、そうですねえ・・もし採用していただいたらの話ですけど来週の月曜日くらいから出でられると思います」

「そうですか、ウチとしても小山さんには、是非とも来ていただきたいのでお願ひします」

中央に座つてこる男はあまり表情を変えずに言つた。

「ありがとうございます」

山田運送での面接はこれで終わつた。帰り、舞子は車の中で男達の名前を聞いていないことに気付く。

普通は面接の前に名詞をいただけたりするなどと思っていたが、山田運送のような中小企業にはそのような文化はないのかも知れない、だから、中小企業なのかも知れない。

舞子は推測した。そもそも舞子にあまり期待していなかつたのではないか、だから男達は名乗ることをしなかつた。でも舞子は合格したらしい。来週の月曜日から出社するらしい。だから男達の名乗らないという行動が余計不可解に思えてしうがない。こうも考えられる、男達が自分の会社に誇りを持っていないのではないか。なんか恥ずかしいというか、そんな気持ちがあつたのではないか。

面倒くさくなつてきたので舞子はそこで考へることを辞めた。

出社するまでの間。

舞子はまず、オーナーに報告した。オーナーは大げさに喜んで。

「よかつたな、まあがんばれよ！」

などと嘯いているが、この人は自分の事をどんな風に思っているのだろうと考へる。オーナーの娘は舞子も知つてゐる、昔から頭が良くて優等生だった。今は国立大的学生である。舞子は彼女が何をしているか知らなかつたが過去の舞子のイメージと国立大に通つてゐるという事実とで医学部とか、法学部などの学部で、きっと将来は一流企業に就職するのではないかと勝手に思い込んでいる。

二日間でコンビニの残務処理を済ませ、残りは特に何もせず、だらだらと過ごした。もうフリーターではなく会社員なのだからと、両親に対する後ろめたい気持ちも消えていた。誰かと遊びにいこうとも考へたが、平日なので誰も相手してはくれない。

だらだらと過ごしていたせいで、舞子は来週から働くことすら忘れていた。山田運送のことが意識に上ることは面接以来ほとんど無い。ようやく会社のことが頭に浮かんだのは前日だった。

面接の時と同じような洋服を着て、舞子は山田運送に出社した。

2 面接（2）（後書き）

投稿済みの作品でも一部変更することがあります。
感想・意見大歓迎です。

3 面接（3）

山田運送に着く。

正面玄関に入る、右手に事務所が見えるが誰も出でくる気配がない、皆意識的に舞子の方を見ないようしている感じがする。その場に立っていることがなんだか氣まずいので舞子は事務所に入つて自分から声をかけようと思つ。

天井まで届くパーテーションで区切られた事務所スペースの壁はタバコの煙で黄ばんでいた。ドアを開く。事務所の広さは30畳ぐらいだらうか、舞子が入ってきて数人が顔を上げた。その中で一番入り口に近いところに座つていたおばさんが声を上げた。

「はい」

「おはよう」「やあこまます。本日から働かせていただく小山ですが・・・」

「あつ ちゅうとまつてね」

おばさんはヨリのディスプレイに張られている付箋を見た。
「えつと・・」やままこさんね

「あつ そうでゅ」

「ちゅうとまつてててね」

おばさんはすぐ後ろにいる田つきが鋭い女に声をかけた。

「ねつねつちゃん 森山専務どこにいるか知つてる」

「あ、今日あやの日なのでたぶん今日のあやの作つてるんじゃないですか」

「あそ、ありがとう」

さつちゃんと呼ばれた女は表情をまったく変えずに応えた、舞子はさつちゃんという名前を覚えようとしたらが次あつたときに覚えている自信は無かつた。

「小山さんすこし待つてくれる」

「はー」

おばさんは立ち上がると事務所の扉を開け、小走りに消えていった。

おばさんがいなくなり、舞子はおばさんの机の前に立っていた。他の人達は仕事をしている。何もすることができないので舞子は困った。話しかけるわけにもいかないし、壁にもたれかかる気にもならない。誰も舞子に一瞥もくれないが、それが余計に舞子の居心地の悪さを増強させていた。しばらくするとおばさんが戻ってきた。自分の机の前に突っ立っている舞子に話しかけた。

「もうすぐ専務来るからね」

「あ、はい」

おばさんはらぐだ色の細身のパンツに白のカットソーという格好で腕には黒いコテをはめている、典型的な事務職の格好だ、あまりにもイメージ通りだ。

「まあそこの机に座つて、今日そこの人休みだから」

「あつはい」

おばさんの隣の机に舞子は座つた。机には透明のシートが敷いてあり、中に書類などを挟めるようになつていて。見るとどこかの名刺やら写真やらが無造作にはさまれている、ディスプレイの横にはペンたて、ティッシュ、卓上カレンダーと何かペットボトル飲料のおまけだろうか、小さなキャラクター人形が置いてある。卓上カレンダーで今日の日付を確認する。赤ペンで「A」と書いてある、なんだろうかと舞子は思った。

「いやおはよう、小山さん」

舞子が顔を上げると専務が立っていた。面接の時に一番話しかけてきた男だ。どうか、この人は専務だったんだ。

「あ、おはようございます、よろしくお願ひいたします」

「はい、よろしくね、ちょっと小山さんいらっしゃ着てくれる?」

「はい」

専務は入り口のドアを空けて舞子に先に出るよう促した。席を立ち小走りにドアに向かう。専務の後を追いドアの左側、玄関とは反

対の方角の通路に専務は進んだ。蛍光灯は一部しか点いてなく、薄暗い。壁には「安全管理週間」やら「なくそうヒヤリハット」やらのポスターが張られている。ポスターはどれも古臭く、一昔前の感じがする。

突き当たったところに階段があり、階段は2階3階と地下につながっている。専務は階段を下り、地下に降りていく。地下は一切照明が点いてなく、真っ暗だった。舞子は不安になりながらも専務の二三歩後ろをついて行く。階段を下り切つてすぐに専務はドアを開けた。ドアから光が漏れて地下の廊下を照らす。天井にはパイプが走っている。廊下を挟んだドアの真向かいに火災報知機がある。電気は消えている。入るなり専務は口を開く。

「おはよう、今日から入った小山さん」

室内8畳くらいだろうかは窓が無く、天井で薄汚れた蛍光灯が光っている。数が多いので暗くはないが、蛍光灯が汚れているので部屋には薄汚れた黄色い光が充満している。中にはＰＣが数台並び数人が方を寄せ合つようにして何か作業をしている。そのうちの一人の男が専務に向かって話しかけた。

「なんだ人とつたのかい」

男は最初一瞬舞子の方を見て、すぐに目をそらし。専務に話しかけた。

「とつたよ、見込みあるぞ」

「ほんとかい、またやめられたらこまるよ」

「いや優秀だつて ねえ小山さん」

「あつはい よろしくお願ひします」

専務が突然フレンドリーに話しかけてきたので舞子は戸惑つた。挨拶をするときにも専務の顔以外見ることができなかつた。舞子の挨拶に何か返事をする者は誰もいなかつた。

「まあちゃんと教えてくださいね」

男が専務に言つた。専務はあいまいな相槌を打つて部屋の億に進む、一番奥にドアがある。専務は舞子にに中に入るよう言い自分

も中に入った。

中には金属製の棚が並んでいて、ダンボールやよくわからない部品が乱雑に並んでいる。箱には「純正部品」などと書いてある。そういえば山田運送は運送屋だ。面接に行つた時に聞いていたのに忘れていた。きっとこれは保守部品が何かだろう。机が3つあり、ひとつは書類やダンボールが山のように積んである。隣の机には男が座つてなにやら部品を掃除？している。

専務は棚と棚の間に入つて行き、どこからか椅子を持ってきて自分で最後の机に座ると、舞子にも座るように言った。

「ここは何の部屋なんですか？」

「ああここね、ここ整備室なんだよ、車庫とつながつてんの」
部屋が薄暗いのでよくわからないが、棚が並んでいる部屋の奥はどうやらシャッターのようだ、隙間から僅かに光が漏れている。僅かにオイルの臭いもある。

「あのね、きょうあさじえの日つていう日でみんな駐車場に集まつて社長の話を聞いたりする日なんだよ。社長今日いないけどね。そこで小山さんのこと、紹介するから。あと後で話すけど、今日は私についてね、会社の中やお客様の所行つたりするから」

「専務さんはいつもここにいるんですね？」

「ああ、私整備の責任者だから」

「へえ」

専務は胸ポケットからタバコを取り出すと火をつけた。専務を挟んで向こう側の男はこちらを気にすることなく金属のブラシでなにやらやつている。舞子はこの建物の構造がよく理解できていなかつた。地下なのにどうして車庫と直結しているのか。あと専務は何故専務なのにこんな薄汚いところにいるのか。ここで働いている人たちはなんだか皆無愛想だった気がする。社員同士がいがみ合つていい感じはしない、適当に仕事をしているような感じがする。ものすごく生活感のある会社といえばいいのだろうか。舞子は人の家にお邪魔しているような気がして緊張が解けない。初めてだから仕方の

無いことかもしれないが、挨拶くらいはするべきではないのか。言
い方は悪いが舞子は彼らを程度の低い人間だと思っている。所詮中
小企業なんだなんて、舞子は考へている。専務は腕時計を見ながら
あと10分くらいで外に行くと言つた。煙草の煙が行き場を失つて
専務の周りを漂つてゐる。舞子はまだ初日だから文句言つても仕方
ないと気を取り直して言つた。
「私も煙草吸つていいですか」

4 回り（1）

「あつどりや」

専務は特に表情を変えることなくそう答えた。

舞子はポケットからヴァージニアスリムを取り出し、使い込んでいるヴィヴィアンウエストウッドのライターで火をつけた。女は基本的にタバコを吸わないと考えている男が多く、舞子はタバコを吸うたびに何か遠慮しなければならないようない居心地の悪さを感じていた。専務も舞子がタバコを吸う断りをとった時、ダメだとは言わなかつたものの、こうして指を立てて煙を吐き出す舞子を少し見て、驚いたような表情を見せた。

緊張していたせいか、舞子はいつもよりタバコを吸うストロークが深くなつた、一気に吸うので口腔にはいがらっぽい煙が入つてくる。タバコの柄に印字された文字が燃えてなくなりそうになつたとき、専務が言った。

「そろそろあさこえだから、行こ」

「分かりました」

専務がもう一つの扉を開けるとそこは確かに車庫だった、中途半端な半地下になつていて。緑色の軽自動車が一台止まつていて。専務はそのまま半地下の車庫の坂道を登り、駐車場に出た。駐車場にはもう既に20人程の人が集まつていた。どこからかビールケースが駐車場の真ん中に置かれている。専務が現れると20人は一斉にビール瓶の前に整列した。表情は暗い。

専務はビールケースの上に立つと、さつきの「あつちゃん」が突然叫んだ。

「今日のあさこえ！」

すると残りの19人もほとんど乱れのないタイミングで

「今日のあやじゅくー・安全第一ー。」

と一斉に叫びだした。

「今日のあやじゅくー・安全第一、今日のあやじゅくー・仕事は主ー。」

「今日のあやじゅくー・安全第一。社会貢献こりつしゃこませんー。」

「ありがとうございました。もつしわけござれこませんー。」

「もつしわけござれこませんー。また、利用くださいー。」

「誠意ー・誠意ー・誠意で今日もがんばるぞー。」

「おおおー！」

舞子はその様子をただあっけにとられて眺めていた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4890d/>

暗い

2010年10月12日08時53分発行